

アンデスの人魚（研究ノート）

加藤 薫

一

世界の中で人魚が棲息する場所はまだ沢山残っているようだが私にとって最も興味深い生息地となると標高四千メートル前後はあるアンデスの山中である。もち論ここで話題にしたいのはマナティーとかジユゴンといった生物学的には海牛類に属する海獣（その多くが人魚イメージのモデルとなったことは事実だが）のことではない。人魚の存在は長らく海と密接にあると考えられてきたが必ずしも海に結びつけなければいけないという必然性はない。また海ではないがアンデス山中にはペルーとボリビアにまたがるティティカカ湖はじめ大小の火山湖や川があるからここでまた淡水の存在と人魚を結びつけて考える人もいるかも知れないが、川や湖は他のラテンアメリカ地域にも数多く存在する。なのにアンデス高地以外で人魚の存在が確認されているのは今の所メキシコやグアテマラ内陸部くらいだから、淡水があるからといっ

ても必ず人魚がいるわけではない。要するに人魚の存在の前提条件に水の存在を常に想定する必要はないということになる。ちなみに人魚イメージの源泉の一つとなった海の精セイレーンの画像表現には上半身が女性で下半身が鳥の姿で描かれているものも多い。ギリシャの詩人ホメロスの大叙事詩「オデッセウス」第十二歌の中で、オデッセウスはじめ乗組員を誘惑するセイレーン島の住人である海の精セイレーンは空を飛んでオデッセウスの船に留まりそこで人間を鳥へと誘う魅惑的な歌を歌った。

現在私たちの知る「人魚」はこの日本語に表象されるように鳥形の下半身が魚形に変身したものだが、セイレーンの起源から考えると海や河川、湖といった「水もの」が必須の条件とはならないことがわかる。尾形希和子はラテン語で羽根を指す言葉「pennis」と魚の鱗を指す言葉「pinis」の間の類似性を指摘し（『海の豊饒』、「イメージの解説―怪物」収録、河出書房新社、一九九一年、五四頁）、さらに「注」でもギリシャ語でやはり

羽根を指す言葉と鱗をさす言葉の同一性を論じた文献を紹介している(同上)。だからアングレスの山中に人魚がいたってちっともおかしくはない。しかし何故アングレス山中の特定地域に人魚が集中的に棲息しているのか、その理由は知りたいと思っている。この好奇心が十分に満たされるにはまだまだ時間がかかりそうだがとりあえず研究ノートという形で本稿をまとめてみよう。

二

ウィック・ド・ドンデ著 “Le chant de la sirène”

(邦訳監修荒俣宏『人魚伝説』、創元社、一九九三年)の序文で荒俣宏は「人魚の歴史は、まことにおもしろく、また人類の知識の進歩や意識の変化を忠実に写しだす鏡ともなつて」(八頁)おり、人魚に魅せられ、人魚について記した本や画像表現などは「その鏡の鏡になっていくと思う」(同上)と述べている。鏡の鏡というレトリックがまず面白い。というわけで数年前から古今の人魚に関する画像表現の収集を始めてみた。同時に文献検索も始めたのだがどちらもまだ「発見途上」で先は長い。ちなみに筆者の地元御殿場市の市立図書館でのキーワード検索でもリストは優に二百七十点を越えていた。もっともこのリストの中には子供向けの絵本から紙芝居、ビデ

オも多かったし、入力ミスからか「ニンギョウ」項目もかなり混じっていたり重複入力分もかなりあったので実際使用可能な文献の実数は六分の一以下であった。それにしても日本語の実用書中心に運営されている蔵書七万冊程度の一地方図書館でさえ人魚関連の文献が数十冊もあったというのは少々驚きではあった。それだけ人魚に取り憑かれたか魅せられた人が多いということだろう。

人魚について日本語で書かれた現在入手可能な出版物を手近な所で調べてみると大体三種類から四種類の人魚ものに分類されるようだ。ひとつは十六世紀以来西欧で発展する博物学の延長にあるものといってよいもので、これは人魚のイメージの源泉を实在する海の生物に結びつけてその正体を明かすタイプといってよいだろう。「人魚」という言葉をメタフォリカルに扱い実際には海獣の発見の歴史や生態を解説するもので、例えば神谷敏郎著『人魚の博物誌』(思索社、一九八九年)の副題には「海獣学事始」と記してあり、その第一章は「人魚学事始」とまとめられている。神谷は一九八〇年にすでに『人魚の正体—ジュゴンの生物学』(自然、中央公論社、一九八〇年、第三十五巻、六号、四十五—五十三頁)を發表しているが、日本の天然記念物として指定していたにもかかわらず絶滅に追いやってしまったジュゴンへの追憶の辞となっている。この発想の先駆者に古くは南方

熊楠（『人魚の話』、牟婁新報、一九一〇年、「南方熊楠全集」第六巻収録、平凡社、一九七三年）などがおり、最近の出版物から見られるこの系譜には他に鳥羽水族館副館長を勤め、長年ジュゴンの飼育に携わってきた片岡照男『ジュゴン—人魚学への招待』（研成社、一九九七年）や畑正憲『人魚の国—天然記念物の動物たち』（角川書店、一九八六年）などがいる。

人魚の正体とされる海の生物はジュゴン、マナティー、それにイルカ、チョウザメなどが候補に挙げられるが、このうちジュゴンは「西太平洋からインド洋にかけての温暖な海域にだけ生息している種類なので」（神谷、前掲書、i頁）西欧ではほとんど目にするのがなく、その故に余計人魚のイメージと深く結びついたと想定している。神谷は十九世紀ドイツの動物学者イリーゲル（Johann Carl Wilhelm Illiger）の海牛類の分類を紹介しているが、その記述に依ると、マナティー属（Trichechus）、カイギュウ属（Rhytina）、及びジュゴン属（Halicore）の三属に分類され、そのうちジュゴン属にあたえられた名称はギリシャ語の *hal-*「海」と *core-*「乙女」の合成語で「人魚」を意味していることに着目している（前掲書、二十九頁）。ちなみに属分類の上位にあたる「目」の分類でカイギュウ目にはシレニア（Sirenia）の名称が与えられているがこれはやはり人

魚のイメージと重複する海の精セイレーンの名称を当てはめたものだ。問題はそれこそ世界各地に存在する人魚伝説の発生を包括的に全てこういった海獣類の存在と結びつけて考えてよいものかどうか、という疑問に十分な解答が得られないことだろう。人魚を（死体の状態であれ）見た、釣り上げた、飼育した、という類の事例は実に沢山ある一方、架空の人魚神話にこそ本質的なものが備わっているとも考えられる。もちろん実在の海獣類を人魚に見立てるのもまた人間の想像力の産物ではあるのだが……。ちなみに人魚の数え方は「・匹」であり、まれに「・人」を充てるそうだが（新明解国語辞典、第四版、一九九五年、三省堂）。

人魚に関する出版物の二つ目のカテゴリーは様々な創作の源泉として人魚のイメージを引用したり借用しているもので、この中には思索の形をアレゴリカルに表象しているものも含めてよいだろう。実際の所、このカテゴリーに属する出版物は風俗小説で単にタイトルのみに使っているものや、ダンテの『神曲』（煉獄編、第十九歌）とかシェイクスピア『真夏の夜の夢』（第二幕第一場、オペロンの科白）など日本語以外のものも考えると本稿ではまとめきれない。サブ・カテゴリーとして子供向けの童話や紙芝居、少年少女もの、漫画などを別に設定する必要もあるだろう。

定かではないが筆者と人魚の最初の出会いはい小川未明作の童話『赤いろうそくと人魚』かH・C・アンデルセンの『人魚姫』の翻訳あたりではなかっただろうか。昭和二十年代には自宅に全巻そろっていた講談社の講談ものを絵本仕立てにしたシリーズの中にも浮世絵風の極彩色で艶めかしい白い肌に濡れ髪のおどろおどろしい人魚のイラストがあったような気がする。ドンデの著作（前掲書）に挿入されている「東洋の人魚」の項（一三八―一三九頁）を見るとそれはどうやら曲亭（滝沢）馬琴作『南総里見八犬伝』の話の一部だったようだが物置に入っていた原本はすでにバラバラになってしまっているのので確証はない。九輯九十八巻に及ぶオリジナル本の挿絵は柳川重信、溪斎英泉、歌川貞秀、歌川国貞など多くの著名な浮世絵画師が担当した。但しドンデ本の引用（小池藤五郎校訂版）は第六十一回からのものとなっているが手元の完訳資料では第二百二十九回で終わっているの異なるものかも知れないが確認出来ない。

そういえばやはり子供の頃に読んだ翻訳ものの『千一夜物語』の中にも人魚風の挿絵が入った物語部分があったような気がしたので改めて調べると、九百四十一夜から九百四十六夜の間語られていた（マルドリユス版『千一夜物語』、佐藤、阿部他共訳、第十三巻、「バイバルス王と警察隊長たちの物語」、岩波書店、一九八三

年、四〇四六頁）。谷崎潤一郎の西欧への憧れをロマンティックに反映させた『人魚の嘆き』や安部公房の死と再生の物語を独特の文体で語る『人魚伝』を読んだのはそれから大分後のことになるし、今回執筆のためにキーワード検索している中に中原中也の名があったので学生時代に買い込んだ中原中也全集をひもといたがお目当ての、人魚のいない『北の海』（角川書店、第一巻「在りし日の歌」、二一九―二二〇頁）を読み返しても昔読んだという記憶は薄かった。立松和平の初期の短編『人魚の骨』（一九六九年）を読んだのは単行本（六興出版）になってからだとすると平成二年以降だが、ここでの人魚の正体はイルカのことのようにだ。

人魚が演劇に扱われた例は勉強不足もあってあまり知らないが、一時はまっていた野田秀樹の作品の中に『回転人魚』（新潮社、一九八五年）という人魚のイメージを徹底的にパロディー化したものがある。山崎洋子著『長崎・人魚伝説』（集英社、一九九二年）は人魚を直接扱ったものではなかったが、カバリーに使われたルネ・ラリックというアール・ヌーボー様式の代表的ガラス工芸作家の三脚鉢（一九二〇年作品）にあしらわれた人魚の曲線のあまりの美しさに魅かれて読んでしまった。山崎は最近神奈川新聞に連載小説「人魚を食べた女」を書いているがこれは不老不死の人魚伝説をベースとしてる。

人魚にとりつかれた作家といふべきか。また二十代の作家松本さゆり著『人魚の棲む森』（河出書房新社、一九五五年）は人魚を森の住人とし、男の子供にとつて乳房までは独占することはできても下半身は犯すことのできない母親という存在の原体験と人魚のイメージを重ねている。そういえば松本のデビュー作は『水槽の中の泳がない人魚』というやはり人魚ものであった。自宅の書棚を見ると他に高橋留美子作の漫画『人魚の傷』（小学館、一九九三年）なんてのもあるが、これは若狭の長者の娘が人魚の肉を食べ、十五、六歳の美しく若い姿のまま八百年生き永らえたという八百比丘尼の不老長寿の伝説から発想したものようだ。またこの原稿入稿時に岩井俊二著『ウォーレスの人魚』（角川書店、一九九七年）が刊行されたが、一九世紀後半にダーウィンより一早く進化論仮説を論文にまとめたアルフレッド・R・ウォーレス（一八二二—一九一三）の遺作『香港人魚録』を軸に、二本足歩行の起源や人類には他の動物並みに毛のはえな理由を人魚に求めた意欲作品だ。

映画になった人魚ものといえばまずデイズニーのアニメが思いだされるし、語学教材なども含めて考えても子供向けのアニメーションとなると実に多くのバージョンがあるようだがそのほとんどがアンデルセンの『人魚姫』を下敷きにしているようだ。大人向けの人魚もの映画と

なるとAVものを除いては極端に数は少ない。その中にはポー・デレク主演の『スプラッシュ』の印象が深い为名画というわけでもなかった。こういった人魚作品をまさに鏡の鏡として記号的、あるいは文化表象のメタファーとして解説してゆくことに興味はあるがさしあつての課題ではない。このへんでひとまず次の話題に移ろう。

残った最後の三つ目のカテゴリーは本稿表題とも直接関連する文献類で、アンデスの人魚たちの前に筆者を導き、彼女たちとの対話をも可能にしてくれる鍵を握っているものだ。神話や伝説、あるいは史実の中に登場するさまざまな人魚を紹介し、タイプ別に分類し、また様々なアプローチによる解釈や、図像イメージの解説を試みる類のものである。先に紹介したドンデの著作はその典型だが、この本の監修者である荒俣宏の著作で人魚の図像について紹介しているものに『怪物誌』（ファンタステイック12シリーズ、第一巻、リプロポート、一九九一年）、『世界大博物図鑑』（第二巻「魚類」、平凡社、一九八九年）、『図鑑の博物誌』（リプロポート、一九八四年）などがある。

尾形希和子の論考『海の豊饒…二又の人魚像をめぐって』（前掲書）はイタリアのロンバルディア州からエミリア・ロマーニャ州を流れるポー川流域に点在するロマネスク教会堂建築に登場する人魚の図像表現のうち、特

に柱頭部分やメダイヨンに施された二又の、すなわち足(尾)を左右に開いてそれらの先端を両手で握っている人魚図像に着目しその象徴的な意味を探っている。「人魚が二又であるという記述をしている文献はない。それではなぜ図像表現のみそれが存在するのか。その起源はどこに求められるものだろうか」(五十四頁)という指摘と問いかけは興味深いものがある。

やや通俗的ではあるがコンピュータ・ゲーム世代向けに書かれた『幻想世界の住人たち』(健部伸明と怪兵隊、新紀元社、一九八八年)にはセイレーン、ハーピー(ハルピュイア)、そしてマーメイドの表象を区別し、また簡潔に通説をまとめている。この分野では他に澁澤龍彦『人魚の進化』(「幻想博物誌」、一九七八年、角川書店)があるがベースにはローマの博物学者プリニウスのラテン語原典『博物誌』があるようだ。辞書、辞典、事典類ではその扱いの大小強弱はあれこそすれほとんどに関連項目がある。

ちょっと興味深い点としては女性からの人魚観を期待したバーバラ・ウオーカ著の『神話・伝承事典―失われた女神たちの復権』(The Woman's Encyclopedia of Myths and Secrets : 山下圭一郎主幹他共訳、大修館書店、一九八八年)には特に目新しい視点からの記述がなかったことだ。手元には原書が無いこともありあくまで

推測での話だが、その理由をユング流の社会心理学的に考えるならば「人魚」とは男性たちの普遍的無意識内に存在するアニマ(男性〈性〉の中に潜む女性像の元型)の一つの表象であり、実に様々な意味を内包しているから女性からの立場からは扱いにくい主題なのかもしれない。とはいえ人魚には男性 (merman) もいるからこちらはアニムス(「アニマ」の男性型)の表象として対に考えてもよさそうだがどうも男性人魚については起源からしてそのようなものではないのだろう。

図像に表現された人魚のイメージを解説する際には東西交渉史を専門とする歴史家クロード・カブレールの分類(幸田礼雅訳、『中世の妖怪、悪魔、奇跡』(新評論社、一九九七年)が参考となる。カブレールは第四章第一部(同上、一八七~二七四頁)で妖怪なるものを十一の諸形態に分類しているが、人魚の様々な図像表現に隠された意味を探るのには格好の指標となる。但し筆者はまだラテンアメリカの人魚表現にこの分類を適用するまでもに至っていないし、またその妥当性までも検討はしていない。

アンデスの人魚たちはそのほとんどが教会堂や植民地時代の建造物を棲家としている。ということは明らかにキリスト教登場以降の図像表現や意味が付与されている可能性が高いということではある。だがそういつた解釈だけでよいのだろうか。紀元前六千年紀の古代バビロニア時代にまで遡る必要はないにせよ、当然ラテンアメリカ世界とコンタクトのあった非キリスト教世界にも幅広く存在する人魚イメージとの相関関係はない、といいきれるのだろうか。十六世紀から十七世紀のラテンアメリカ植民地建設時代、まだ先住民インディオたちが西欧式の建築や建築装飾の技術や意匠をまだ十分に習得できていないことや熟練職人の絶対数不足を補うために石造建築に熟練した主としてギリシャ出身の職工を雇用したことは知られてゐる。(Kubler, George, and Martin

Soria, *Art and Architecture in Spain and Portugal and their American Dominions 1500-1800*, Penguin Books, England, 1959, 三九六頁)。こういった職人たちが後世の我々が想定するほどに十分キリスト教徒的、正統カトリック的であったという保証はない。

またラテンアメリカの先コロンプス時代の文化の中には本当に我々のイメージする人魚に相当する表象や伝

説神話がなかったのか、この点でも実のところまだ確証的なことは言えない状況にある。コロンプスの航海以前にも大西洋を航行してアメリカ大陸と遭遇した北欧バイキングや太平洋を越えてやってきたはずのアジア・太平洋諸島の人々が持っていただろう人魚(あるいはそれに相当する)の図像イメージや伝説は全く伝えられることはなかったのか、この点もまだ説明されていない。とりあえずここでは本題に入る前に一般的な人魚の歴史について復習してみよう。

ほとんどの文献は人魚イメージの歴史を紀元前六千年から七千年前のメソポタミア南部が発祥の地として取り上げている。しかしこのバビロニアの歴史はシュメール王朝およびアッカド王朝の始まる紀元前三千年代以前については調べる限りほとんど何もわかっていないというのが実情のようだ。ティグリス、ユーフラテス両河川によって形成された沖積平野は紀元前六千年前には現在とほぼ似た状態に形成された。ここに最初の定住生活共同体を築いたのはウバイドの住民で南部のエリドゥに紀元前五千年頃の建造物である小神殿と人工灌漑施設を残している。ウバイドの住民が後に出現するシュメールやアッカドの先祖であるかどうかまではまだわかっていないらしい。シュメールの粘土板に書いた絵文字が出現するのは考古学でいうウルク期(紀元前三千八百〜三千年)だ

が、この時期に人魚イメージの原初とされる海神オアンネスへの信仰なり文字表記があったかまだ解明されていない。

実際にシュメール人の間でエンリル神を最高神とする多神教の神々の属性が確立し、それがバビロニアにも伝えられたのは少し後のことで大体紀元前二千六百年から二千五百年のこととなる。この時期になると半神（人）半獣の英雄的主人公の表現が急激に増えてくるのだが、具体的にオアンネスの画像があるかどうか筆者はまだ確認できないでいる。荒俣が例証しているオアンネスの彫像（ドンデ、前掲書、一頁、及び平凡社大百科事典「人魚」項）はコルサバード出土のものだがこれは紀元前八世紀の作とかなり後の時代のものだ。上半身は男性で下半身が魚となっているオアンネスは、昼は陸上で王として振い、人間に農業と技術工芸を教える生活を送るが、夜は海に帰るといふ神であり、海の支配者であることから航海の安全を祈願する対象となっていた。

シュメールの歴史には大洪水の発生と再生の物語がある。これはシュメール初期王朝期の始まる紀元前二千八百年以前の故事をベースとしているらしいが、この物語は後にユダヤ人の伝承の中に登場し旧訳聖書にも記述の出てくる大洪水とノアの一族の物語に反映される。ノア（Noah）の正体は実はオアンネス（Oan <nes>）であ

るといふ推察は言語的にも類似性があり興味深い指摘である（ド・フリース、『イメージ・シンボル事典』、「人魚」の項）。旧訳聖書には他にダゴンというやはり半人半魚の神様が登場するがこれもオアンネスを原型としているらしい（同上）。そしてオアンネスと妃ダムキナとの間に生まれた六人の子供も下半身は魚の姿をしていたという。それ故にノアの洪水に関する画像表現には人魚が描かれるのが一般的である（Mercatante, Anthony S., *The Facts on File Encyclopedia of World Mythology and Legend, Facts on File, New York, 1988, "Noah"*）そうだが、十六世以降のキリスト教美術画像表現を扱った事典などでは、このことに言及していない。（例えば柳、中森編「キリスト教美術図典」、吉川弘文館、一九九〇年、等。）

またシリア（古代地理では現在のトルコ共和国南部からレバノン、イスラエル、シリア共和国、ヨルダンにまたがる地域を指す）では都市国家エブラがほぼ全地域を支配した紀元前二千四百年頃から粘土板文書が多数作られるようになったが、宗教面でも統一的なイメージが出てくる。基本的に農耕豊饒神崇拜でありバアル（男神）とバアラト（女神）が対となって信奉されたが、バアルはやがてバビロニアの影響で段々と一神教的性格を強めた抽象的な絶対神に昇格していく一方、バアラトはより

地母神的性格を強めた女神アタルガテへと神格を変容させていった。アタルガテは月と水の女神という属性も持ち合わせ、川や海の産物の豊饒を象徴するため魚の鱗と鱗を持った半人半魚の姿で表されるようになる。アタルガテは後のギリシャ神話に登場するアフロディテやローマ神話のヴィーナスの原型になったとの解釈が一般的だ(フリース、前掲書、「マーメイド」項)。

その一方、ギリシャでも独自の人魚の原イメージらしきものを発展させた。ネレウス(Nereus)やトリートン(Triton)がその例だ。ネレウス自身は身体中が毛で覆われ、顔も白髯で三叉の戟を持つ海の老人の姿で表されるが、妻ドーリスとの間に五十人(百人との説もある)の娘をもうけた。この娘たちはネーレーイス(Nereis)と呼ばれ海底の宮殿に住む美女たちだが姿形は普通の女性であった。トリートンはオアンネスのギリシャ版であるポセイドーンの子供で、半人半魚の姿でポセイドーンに従い海馬に跨がりほら貝を吹く(高津春繁『ギリシャ・ローマ神話辞典、岩波書店、一九八二年』)。大酒飲みで、それゆえの失敗談に事欠かない存在だ。

ギリシャ神話の中ではやはりセイレーンが最も人魚のイメージに近いが冒頭にも書いたように下半身は鳥である。荒俣はセイレーンの下半身が魚に変貌していったのは非地中海西欧神話の影響もあるのではないかと示唆す

る(前掲書、三〇四頁)。ドンデは具体的に八世紀頃に実在したイングラント出身の修道士アルドヘルムの『怪物誌』の記述から、初めてセイレーンが魚の下半身を持つという精霊や神々と結びついた新説として登場したことを述べ、このイメージのルーツにケルト起源の様々な人魚伝説があつた事を検証している(同上、五〇―五三頁)。確かに同じ時期、八世紀には魚の尾を持つセイレーンの現存する最古の図像表現がケルト文化圏で完成していた。『ケルズの典礼書』(アイルランド)やフランスのカロリング王朝時代の典礼書などに登場してくる人魚像は最古のものと分類されてよい。前者の『ケルズの典礼書』はケルト美術伝統の組紐文様に準じたデザイン的なものだが、後者では聖母マリアとの対比で何かネガティブな存在に記号化されている。

アイルランドの守護聖人であり五世紀に伝道活動で活躍した聖パトリックがその布教時に素直にキリスト教に改宗しない女性たちを全て人魚にしてみましたという伝承が生まれたのはいつのことかわからないが死後それ程経ってからはないと推測される。おそらく六―七世紀に聖パトリックの後を継いでブリテン島からアイスランド、ノルマンディー地方などで布教活動を展開したアイルランドの修道士たちは、各地で様々な人魚伝説(イエイツ、W・B、編、井村君江編訳『ケルト妖精物語』、ち

くま文庫、一九八六年、ブリッグス、キャサリン、井村君江訳『妖精 Who's Who?』(一九九六年)に出くわしたことと思われ、それらを聖パトリックの行状に結びつけたのだろう。いずれにせよここでもキリスト教から見て人魚にネガティブなイメージが付与されるその萌芽が見られる。その他に非地中海世界ながらセイレーン系の人魚伝説といったらライン川に棲息するといわれるローレイがいるが、十九世紀に脚色されたロマン主義作家の描く恋に破れた乙女のイメージが強く、古層にあるはずの原イメージまでまだ辿りつけないでいる。

いわゆる西欧中世の美術は大きくロマネスク様式とゴシック様式に分類される。これらはまた時代区分にも準拠しているが、人魚の図像表現に付与された含意を考察するとロマネスク時代の人魚とゴシック時代の人魚の間には決定的な差異がある。その背景にはもち論ゴシック時代に至って世俗大衆レベルにまでキリスト教が普及したことが挙げられる。尾形論文はこの点をイタリアにおける二又人魚表現、あるいは足を広げた男女人物像がロマネスク時代にはまだ多く、しかも教会堂建造物などでも主要な装飾モチーフとして人々の目につきやすい場所に設置されていたのに、ゴシック時代になるとそれらは片隅に追いやられるか、消滅するのでなければ反キリスト教的「悪」のシンボルとしてネガティブな扱いを受け

るようになったプロセスを解明している(尾形希和子、前掲書)。尾形は蔵持不三也の説(蔵持不三也著『異貌の中世』、弘文堂、一九八六年)を引用しながら、「足を広げた人物像は魔よけであったり、豊饒のシンボルであったり、キリスト教以前の土着の宗教の生き残りであり、「民衆が教会の枠にはまりきろうとせず、自律的な文化を営んでいた証拠である」とまとめている。(同上、六十頁)

先に紹介した八世紀の修道士アルドヘルムが編纂した人魚の記述では二又の尾について触れられていないから、この種の図像表現がその後の時代のロマネスク期固有のものとして推定できる。二又の人魚は男女あり、それぞれの性を堂々と表象しているものから完全に省略しているものまで様々である。また左右に分かれた尾を両手で持つポーズが印象的だが、その尾の先がまた人間の足の形になっているタイプのものがある。稀ではあるが上半身は乳房の大きな女性だが下半身には男性性を備えたヘルマフロディトウス(両性具有)もいる。尾形論文の主旨は二又の尾を正面に向けて広げた人魚表現が様々な形で非キリスト教的な「豊饒」のシンボルと結びついていたことを論証することであった(同上、六〇～六六頁)。

ゴシック時代の精神の特徴を一言で要約すれば、世界が人間中心のヒエラルキーの元に再編されていた時代

ということである。この考えはヨハン・ホイジンガ

(『中世の秋』、堀越孝一訳、世界の名著第五巻、中央公論社、一九六七年。原著の出版は一九一九年)以降の中世研究の蓄積の成果として今日ではほぼ支持されるに至っている。学説史を検討するのは本稿の目的ではないから省かせてもらうが、大事なことは、この結果としてかつて人間と共存していた動物や怪物、妖怪などその他の想像物は消滅するか周辺に追いやられ、悪魔、悪霊という負のラベルを貼られるか、あるいはコミカルなトリック・スターとして描かれるようになったことだ。ロマネスク時代までは、動物や人魚も含めて怪物とよばれてきた存在は人間と同じくポジティブな側面とネガティブな側面をもつ両義的なものだった。それがゴシック時代には人間だけが徳を持ち、その他の動物や怪物はすべて「悪」の表象となり、美徳を持つ人間に踏みつぶされる存在に貶められた。色欲や快楽の追求は極めて罪深いことであった(ギルマン・サンダー・L、大滝啓裕訳『「性」の表象』、青土社、一九九七年、第二章、第三章)。そこで例えば蛇などは西欧のみならずラテンアメリカを含めたほとんどの世界では水と作物そして再生のサイクルに結びつく豊饒のシンボルであったのが、キリスト教の図像表現の中では男性器の外形と結び付けられたか、誘惑、肉欲といったネガティブな含意へと変質し

ていった。

同様に人魚においても誘惑者、悪魔の使い、娼婦といったネガティブな側面のみが段々と強調されるに至っている。とりわけ尾(足)を高く掲げて付け根まで広げた二又の人魚のポーズは、肉欲を刺激するエロティックな、あるいは淫蕩のシンボルとしてゴシック時代には悪徳の代表のように扱われるようになったことだ。この悪徳への誘惑者というイメージを強調するため、それまでは美しい歌声だけを武器に男を誘惑する人魚はさらにその顔や上半身の美しさという視覚的な要素でも魅力的でなければならなくなった。こうして長い金髪を揺らがせ、手には楡と手鏡を持ちながら腰掛けたポーズで張りのある乳房を誇らしげにさらし、肌の手入れにも余念のない美女の姿で描かれるようになった。男を破壊させる宿命の女(femme fatale)の象徴、地上の人間(男)から魂(理性)を移植してもらわない限り(つまりキリスト教式に人間と結婚しない限り)真の人間にはなりえないという信仰やモラルの欠如した存在というのがゴシック時代以降の人魚像であった。またそれゆえに禁欲的な社会の束縛から解放される一時をすごすための居酒屋や宿屋などにはゴシック時代から人魚の姿をあしらった看板が登場してくるのだ。

さらに興味深い現象としては、こういった人間中心の

世界という認識が浸透してゆくに従って、逆に人魚は実在するという見解や、人魚と交流したという話し、人々の集まる市での見せ物などは増大し（あくまで文献上での確認だが）、まことしやかに伝えられていったのだ。美術や文芸、音楽といった人間のイメージに深く関わる世界では当然考えられることだが、それらに加えて或る時は科学的な博物標本やミイラの体裁を整えて登場することさえあった。西欧において人魚伝説が科学的生物学の見解と一致しない虚構の産物であることが確定するのはやっと十八世紀になってのことである。しかし大衆レベルでは十九世紀になっても見せ物小屋の出し物の中では人氣の定番として続いた。

日本においても江戸末期から明治初期、すなわち十九世紀後半において人魚が科学的な装いのもとに実在するものとして記録された例がある。現在は山形県となる庄内藩の武士で『両羽博物図譜』を記した松森胤保の話が州之内徹著『人魚を見た人』（新潮社、一九八五年）に掲載されている。『両羽博物図譜』は全五十七巻におよぶ図録でひたすら写実的に魚や鳥や草木を手描きで写生していったものだが、その中に一枚「人魚」の写生図（正確には人魚のミイラ）が入っている。図譜全体に貫徹する精緻な描写技術に徹した実証主義の隙間にかいま見える想像物への好奇心の表象は、日本に限らず西欧を

も含めた十九世紀的精神の表れなのかも知れない。最も二〇世紀になっても人魚伝説は生きており、露出度はかえって増大している位だから、二〇世紀末に生きる私たちが進歩しているというわけでもないだろう。

四

西欧内では少しづつ周辺に追いやられ居場所が狭められ、また悪魔だの妖怪だのとのレッテルを貼られて居づらくなった人魚たちはアンデスの山中に居場所を見出した。それがいつからのことだかはまだ不明で今後も調査が必要である。ところでラテンアメリカに在来種の人魚イメージはなかったのだろうか。この点についても今の所は確証的なものがない。コロンブスの航海の成功以来アメリカ大陸およびカリブ圏で破壊された先住民の文化資産はあまりに龐大で、現代まで残された遺産の量は消滅したものに比べると微々たるものだ。それに比べ十五世紀末から十六世紀にかけての西欧のアメリカ大陸征服初期に訪れた征服者たちや聖職者たちは人魚に関する記録を少なからず残している。有名なところでは一四九二年八月三日から九三年三月十五日までのコロンブスの第一回目の航海記録があるが、この原本は消滅しており、現在我々が参照できるのはバルトロメ・デ・ラス・カサ

スという聖ドミニコ修道会所属の神父が原本より要約し、彼の壮大な著作『インディアス史』（邦訳「インディアス史」、大航海叢書第二期、一～五巻、岩波書店、一九四年）の中に引用した部分のみである。

『インディアス史』第一巻第四十四章は一四九二年十月二十八日にクープバ島（現キューバ）コロンブスはフアナ島と命名していた）に上陸し、そこでコロンブスが牛のものに似た頭蓋骨を見つけたという記述を紹介し、ラス・カサスはこれは実はマナティーのものと判断している（同上、四四二頁）。そしてエスパニョーラ島での探險記録を載せた六十六章ではコロンブスが九三年一月九日の航海日誌で前日（すなわち一月八日）に三匹のセレーナ（人魚）を目撃したという記述を紹介し、追加情報としてコロンブスは以前にもアフリカのギネーア海岸で人魚を見た、と述べたことを記載している（同上、六〇二頁）。興味深いことにラス・カサスはここでは人魚の正体がマナティーであるといったようなコメントは残していない。この他にもアメリカ大陸周辺の海域で人魚を目撃したというような類の報告は調べるとかなりあるのだが、そういった資料の検証はさしあたっての課題ではない。ここで一つ指摘しておきたいのは、もしアメリカ大陸の先住民たちが人魚という存在を発想しようと思えば、西欧ではその原イメージとなったマナティーという動物

がかなり身近にいたということなのである。はたして人魚は先住民の間に存在したのだろうか。それともスペイン人たちに〈発見〉されるまでは非在だったのだろうか。或いはスペイン人たちの略奪と破壊のプロセスの中で異教信仰のシンボリックな記号と認識されて消し去られたものなのだろうか。今の所は何もわかっていない。

五

アンデスにおける人魚の図像表現に関する調査はまだメジャーな分野のものとは言えないが、二〇世紀のかなり早い時期から着目し、継続的な調査活動を実施してきた研究者のグループがある。ベネズエラの首都カラカスにあるベネズエラ中央大学の建築都市計画学部の中で建築史、美術史を専門とする研究者たちで、その活動は主として歴史美術研究センター(Centro de investigaciones historicas y esteticas)で行われ、その研究誌にて成果が発表されてきていた。特にグラシアノ・ガスパリーニが同センターの所長に就任し、プロジェクトの主導者となった一九六〇年代から七〇年代の間は最も活発な時期だった。グラシアノ・ガスパリーニは建築史、とりわけラテンアメリカのバロック建築研究を専門とし、極めてオリジナルなバロック論(Gasparini, Graziano,

“America, Barroco y Arquitectura”, Caracas, Venezuela, 1972) を発表して学会でも注目を浴びてきた人だったが、しかし年齢の問題に加えてラテンアメリカに特徴的な政治的派閥抗争に巻き込まれ七〇年代末には職を辞した。その余波なのか詳しい事情はわからないがレスセック・サビスサが所長になった後もしばらくは続いた同センターの研究誌(BCHIE)はほどなくして休刊となったまま今日に至っている。

日本にいるとベネズエラの研究情報などはほとんど入ってこないの、大使館筋や海外に出た折りに図書出版情報などをこまめにチェックしているが限界はある。そんな状況の中で判断する限りこのアンデスの人魚図像表現の発掘と保存、資料収集と整理という壮大なプロジェクトも中断し、成果を単行本で発表する段階には至っていないようだ。またベネズエラから近く、言語や宗教面でも共通の文化圏にあるとはいえず、やはり外国ではあるベルーやポリビアを中心としたアンデスの図像調査には政治経済や国際関係がらみで不安定な要素もあって研究調査継続が困難な状況が発生したことも推測できる。特にラテンアメリカにとって一九八〇年代は「失われた八〇年代」と呼ばれるようにラテンアメリカ全体が経済不況に陥った時期で当然その影響もあっただろう。しかし一九九二年のコロンブスの偉業五百周年という節目を通して

するにあたって、西欧近代に発する美術史の方法やその適用をめぐるラテンアメリカ固有の問題や課題、方向性というものがラデイカルに検討され始め、その中で幾つかの緊急課題が抽出されてきた。詳しくは拙稿『逸脱のラテンアメリカ美術』（「インディアスの迷宮」、勁草書房、一九九二年、収録九〇～一二三頁）に述べている。筆者が提起したかった幾つかの問題点のうち本稿に関連するのはパノフスキーのイコノロジー研究の方法に関する考察である。つまり西欧というパノフスキーな地域でのルネッサンス時代美術研究に極めて有効だったイコノロジーというアプローチがまたラテンアメリカ美術に対しても有効たらしめるには先住民文化時代からの徹底した図像研究が必須の条件となるのだ。

西欧美術との比較、移植や変容、差異の相を明らかにするためにまずその基礎となるラテンアメリカ独自の図像研究が必要である点についてはすでにE・W・パルムなどによって提唱されてきている(Palm, E. W.

“Perspectivas de una historia de la arquitectura colonial hispanoamerica”, BCHIE, No. 9, Caracas, 1968)。L・カステドはこういった図像研究が本質的にはラテンアメリカにおけるヘメスティーン化(西欧文化と土着文化の融合現象)を扱うことになり、西欧美術からのアプローチだけでなく、先住民文化の図像研究も

無視してはならぬと主張した (Castedo, Leopoldo, "Reinterpretación mestiza de los símbolos cristianos", a paper presented for el Simposio sobre el arte latinoamericano, New Orleans, U.S.A., 1972)。

実証的研究についてはE・マルコ・ドルタやA・イニクエスの時代からかなりの蓄積があった (Marco Dorta, E. Iniguez, Angulo, "Historia del arte hispanoamericano", Barcelona, Spain, 3 vols, 1945-47)。またアンデス地域に特化したものではH・ウエズリーの著作 (Wethey, Harold, "Colonial Architecture and Sculpture in Perú", Cambridge, Mass., 1949) やモノグラフィでX・モイッセンの報告 (Moysen, Xavier, La catedral de Puno, Perú, AIEE, No. 31, Mexico, 1962) などがあり、図像としての人魚表現に着目した早い時期の例としてはハルス・テルレの小論文 (Harth - Terre, E., "La sirena en la arquitectura virreinal", Arquitecico Peruano, Lima, 1940) がある。イルマル・ルクスも指摘しているように、二〇世紀前半に始まるH・フォシオンの流れを汲む実証的研究アプローチはそれなりに成果を挙げたが、解釈の段になるとたんにロマンティックになり、先住民土着文化の貢獻について過剰に評価するあまり、大した裏付けのない

まぢ前提としていふことも多かった (Luks, Ilmar, "La sirena como motivo decorativo en la arquitectura hispanoamericana", BCHHE, No. 18, Caracas, 1974, 一一八頁)。例えばウエズリーはアンデスのアルタイプラノ地域の人魚図像はティティカカ湖周辺の先住民が伝えてきた伝説との融合であると述べている (前掲書, 二二頁) が、その伝説がどのようなもので、スペイン人到来以前から存在した土着起源的なものかどうかまでは検証していない。とは言え、アレキッパ市のラ・コンパニーヤ教会堂の調査をベースにアンデスの人魚像が天使のイメージを装っている点など興味深い指摘 (同上、一四二頁) にあふれていることも事実だ。

ルクスはラテンアメリカ・カリブ圏に残存する人魚あるいは〈人魚的〉な図像表現を六つのカテゴリーに分類しているが、人魚図像の発祥を考える上では重要となるデータだ。天使を装っているか、人魚のままであるかその属性の問題はひとまず置くとして、ここではルクスの分類にしたがってラテンアメリカに生存する、〈人魚〉あるいは〈人魚的〉表現の種類を列記してみると、

- (一) 上半身女性で下半身が魚状の組み合わせ、
- (二) 上半身女性で下半身は羽根、葉、籠などの装飾意匠で覆われている組み合わせ、
- (三) 上半身女性、あるいは上半身男性の例もあるが、

どちらにせよ下半身が植物文様で覆われている
組み合わせ、

(四) 明らかに人魚の属性を持つ上半身と非有機体
(リストネスやロリエオスといった幾何形態の
装飾意匠) の下半身の組み合わせ、

(五) 二叉の尾を持つ人魚、

(六) 尾がひとつの人魚、

となる(前掲論文、十二頁)。この中にはウエズィーが
早くから指摘している翼のある人魚(?) 表現を含めて
いないところを見ると、それらは天使として扱いたいと
いうことだろうが説明はない。上記(一)と(五)(六)
の区別は(一)が西欧ではすでに十六世紀には確定して
きた人魚を象徴する持ち物(櫛、鏡、楽器、長い髪など)
をもっていない像ということである。(二) (三) (四)
(四)については十六世紀に流行したグルーテスコ装飾
の流れを汲むものだと解釈もある(Mesa, J. de,
Gisbert, T., "Contribuciones al estudio de la
arquitectura andina", La Paz, Bolivia, 1966) が、
もしこの説を一般理論として適用しようとすると必然的
に、グルーテスコ装飾の導入にあまり熱心でなかったイ
ベリア半島を徐いた西欧美術との交流の相を検討してゆ
かねばならない。

この分野ではF・E・ヘレンダーンの未出版の原稿

(Hellendoorn, Fabienne Emilie, "Influencia del
manierismo nordico en la arquitectura virreinal
religiosa de Mexico, 1980, UNAMより出版予定で
版も組まれているのに何故か現在まで放置されたままに
なっている) やクブラーの論文(Kubler, George, "El
problema de los aportes europeos no ibericos en la
arquitectura colonial latinoamericana", BCHFE, No.
9, Caracas, 1968) が参考になるが、アンデス地域に
ついてとなるとまだ未検討の状態である。グルーテスコ
装飾を産んだマニエリスム美術の背景には、ゴシック時
代以来周辺へと追いやられた異教の神々やそのシンボル、
怪物や妖怪といった異貌の存在をわざとバステイッシュ
(引用) することによってキリスト教にとって正統とさ
れる図像規範に揺さぶりをかけるといふへ知的な遊戯の
の精神があったが、果たしてこの種の逸脱行為の意味が
ラテンアメリカにまで有効だったのかこれもわからない。
いずれにしてもアンデス地域における人魚図像あるい
は人魚的な図像表現が建造物に登場するのは十七世紀以
降のことであることはほぼ疑いない。このことはバロッ
ク建築についての記述を中心に植民地時代の建築史をま
とめたケレメンの著作(Kellemen, Pál, "Baroque and
Rococo in Latin America, Dover Pub., New York,
1951) やセバステイアンの著作(Sebastian, Santiago, "

El barroco iberoamericano, Encuentro Ediciones, Madrid, Spain, 1990), 44-46. バイヨンの著作 (Bayón, Damián, and Murillo Marx, History of South American Colonial Art and Architecture, Rizzoli, New York, 1989) などの定番出版物を参照すればほぼ結論づけられることである。とはいえこれらの主要出版物はどれも人魚図像表現に特化した記述をどこかでまとめているわけではない。当然ながらより詳細な検討が必要だろう。

六

ルクスの別の論文 (Luks, Umar, "Tipología de la escultura decorativa hispánica en la arquitectura andina del siglo XVIII", BCHFE, No. 17, Caracas, 1973) 44-46. Algunas consideraciones sobre la sirena india", BCHFE, No. 24, 1979) やテレス・シスヤントの論文 (Gisbert, Teresa, Quesintuu y Umantuu, las sirenas indias del lago Titicaca, BCHFE, No. 24, 1979) を参照するとアンデス南部山岳地域に存在する人魚図像の全貌がほぼ理解できる。シスベルトはペルーのクスコ市からポリビアのラ・パス市の間の山岳地帯に存在する十七世紀および十八世紀に完

成した教会堂、大聖堂、公共建造物及び個人邸宅を調査し、そのうち二十六か所で人魚図像の存在を確認している。その中では、ワチャカリヤ教会堂、セピタ教会堂、アサンガロ教会堂のものは内部壁画、ヘスース・マチャカ教会堂、グアキキ教会堂のものは十八世紀制作の絵画である。一か所に一匹というわけではなく、多いところではアヤクーチョ市のマグダレナ教会堂(十八世紀)の塔部には八匹の浅浮彫り彫刻が残っている。二十六か所に散在する人魚の総計は六十五匹である。一番古いものは一六一八年制作の丸彫り彫像で二匹ペアになっておりコパカーナ市のサンチュアリオ正面レタブロで聖母マリアの足元に置かれているが、当初よりこの位置にあったのかどうかはわからない。逆に一番新しいものはクスコ市のピウアガの家の正面玄関部に対になって彫られた石彫像で一八〇〇年から一四年にかけての作品である。十七世紀の作品と特定できるものが総計七か所で十八世紀のものが十八カ所である。

十六か所の人魚像が何らかの楽器を携えている。楽器はビウエラ(十二弦ギター)、ラウト(リュート)、およびチャランゴの三種類のみだが、このうちアルマジロの皮を張ったチャランゴは明らかにスペイン人到来以降の発明とは言えラテンアメリカ起源といえるものである。逆にラウドは西欧ルネッサンス時代に登場した比較的新

しい西欧起源の楽器である。翼を持った天使風の属性をもつものが三匹おり、これらはコパカバーナ市のサンチュアリオ、アレキッパ市のラ・コンパーニャ教会堂、およびラ・パス市の聖フランシスコ教会堂に各二点ずつある。

ルクスの分類で(二)、(三)に相当する下半身が植物果物の意匠で覆われているタイプのは七か所、コパカバーナ(サンチュアリオ)、アレキッパ(ラ・コンパーニャ)、ワチャカリヤ(教会堂)、ランパ(教会堂)、セピタ(教会堂)、ポマタ(サン・ミゲル教会堂)、およびラ・パス(聖フランシスコ教会堂)に在る。興味深いアレソジとしては五匹が聖なるアナグラムを表示していることで、このうちアシリオの教会堂(二匹)、ランパの教会堂(二匹)、及びスクレのラ・メルセー教会堂(二匹)のアナグラムは「聖母マリア」を表象している一方、キスピカンチの教会堂及びオロペサの政庁舎のアナグラムは「洗礼者」を表象している。月や太陽、星といった天空を示すシンボルを伴って表現されているのは五か所で、土着の自然崇拜との関連がかなり密接なものとも解釈できるが翼のある人魚像とは必ずしも対応していない。空を浮遊する魚というわけでもなく、人魚が太陽や星を従えているようにも見えるものがある。これらはポトシ市(聖ロレンソ教会堂と政庁舎)、サンタ・ヨカリヤ市(教会堂)、マンキリ市(サンチュアリオ)、及

びアヤクチュ市のマグダレナ教会堂に在る。

幾つか気のついた興味深い点をランダムに挙げてみる。まず楽器だが西欧の人魚表現には一般的な堅琴を持つているものがない。逆に西欧では見られないチャランゴ奏者が多いことが挙げられるがどうしてなのか。セイレーンは下半身に鳥のように細い二本足と鋭い爪先を持つているが翼は閉じた状態(飛んでいるのでなければ)になっているが普通だ。しかし上半身はあくまで人間の女性に近いもので背中から翼をはやしてはいない。これに対してアンデス山地の人魚像の中で翼をもつものは下半身が魚で翼は背中からはやしている。これは天使のイメージにより近いが、逆にセイレーン起源とするには発想に脈絡がなく無理なようだ。つまり別の原イメージを下敷きにしたと考えるほうが妥当なのかも知れない。ジスベルトのリストでは認識されていない属性として、頭の上にはちょうど孔雀の羽根のような突起物、これは見方によっては茎の長い植物のようにも見える、を乗せている人魚がいる。これはクスコ市のピコアガの家、ポマタ市のサンティ教会堂、セピタ市教会堂の人魚で、このタイプの変種としてやはり鳥の羽根の頭飾りを付けたキスピカンチの教会堂信者用出入口口上部に在る人魚も加えてよいだろう。これも西欧には無いタイプであるがこの表現の意味や起源はどうなっているのだろうか。

また人魚は中世以来キリスト教の普及に伴って罪ある存在、悪徳の象徴のように扱われてきた。しかしこの地域では「洗礼」とか「聖母マリア」といったアナグラムを運ぶ、あるいは支える存在ともなっている。つまり救済のコンパニオンという地位が与えられていることから、明らかに同時代の西欧に受け継がれているネガティブなイメージからポジティブなものに逆転しているがこれはどういふことなのだろうか。こういった点を論ずるほどに筆者はまだ蓄積がないので論考を留保せざるをえない。代わりとしては何だがここでしばらく画像を視る快楽に浸ってみようと思う。といっても手持ちの写真やイラスト資料は限られており、とてもジスベルトの二六か所でさえ検証することができないのが悲しいが現状だ。

ワチャカリヤ教会堂の壁画に描かれた人魚は口の所が剝離しており、眉毛から鼻の線がつながっているが眼を含めてイラスト的な輪郭描線で平面的である。^(図1)ラウドを弾いているが左利きで、胸部分はラウドではほとんど隠されておき、男女の区別は定かでない。髪の毛は中央で団子状の鬘を結っており、残りの髪が左右に肩全体を覆うほどに伸びている。髪に隠れて見えない左耳の外側に樹果が見えるがこれは白い鳥(鳩の様である)が口にくわえてきたものだ。腰のあたりで広い六枚の鱗がベルト状につながっているが葡萄の葉のようにも見える。この鱗

の下側は果物を入れる高台付きの箆のような形状になっているが画面の切れる下方はすべて細かい魚鱗デザインで処理されている。ルクスの分類でいう(二)に相当する意匠である。尾の先までは見えず、両側は葡萄やオレンジなどの果物で飾られている。

アサンガロ教会堂身廊部の壁画に描かれた人魚画像はやや西欧に出現する典型的な画像に近いもので立ち姿でビウエラを奏でている。^(図2)ジスベルトのリストではこの楽器がラウドとなっているがその共鳴部がくびれた形状はビウエラのものである。頭の上から尾の先まで曲線で構成されており鋭角や直線部分がなく極めてバロック的な動感にみちている(ジスベルトの調査で十八世紀前半の作品と認定)。特に人間でいえばちょうど膝の位置にあたる所から下の尾が裏返しになっているのだが、この部分の曲線の具合が何ともコケティッシュで刺激的である。フリ市のサン・ペドロ教会堂レタプロ部にある一対の石彫人魚像は奇怪ですらある。^(図3)楽器はチャランゴで左利きのポーズを採っている。丸顔で口を開けた状態は明らかに歌をうたっている最中という風情である。頭部には扇形に拡がった頭飾りをつけている。この頭飾りは七本の中央部が奥にひっこんだ凹型の広葉状要素で構成されており、顔全体をみると現在でもペルーに広く残存するインカ帝国時代の信仰対象だったインティ(太陽神)の

イメージと重なってみえる。腰の所に極端に短いフリルスカートをはいているが下半身は魚形である。この下半身に鱗はない。奇妙なのはピンと跳ね上げた尻尾の先は二つに割れているのだが、その割れ目の角度にあわせて下向きのシェブロンが重層的に連なっているモチーフがあしらわれており、遠くからみると尻尾の割れめから水を吹きだしている、あるいはもう少し漫画的に解読すればスピーカーから音をだしているような、あるいは尾の動きで波紋が広がっているようだ。しかしまた見方を変えれば天から光のエネルギが注入されているようにも解読できる。技術的にみればかなり深彫りのレリーフでそれだけ陰影のコントラストが強く出ているが、まん丸のふくよかな顔つきと対照すると、人魚の持つ二義性や二面性を表象していると言いたくなる。

ポマタ市のサンティアゴ教会堂天井部にある人魚の石彫レリーフは頭の大きさに比べてかなり堂々とした体軀をもっている。^(図5)太い腕に抱かれたピウラはウクレレのように小さく見える。特徴的なのは一見下半身がストレートの一尾タイプに見えるのだが、よく見ると後ろ側でもう一本の尾が交差しているのがわかる。つまり二又タイプの人魚であり、また顔つきや髪型を見るかぎり男性のようでもある。胸はピウラに隠れて見えないし、人間で言えば胃の下辺りからもう魚の鱗で覆われている。セビ

タ市教会堂には正面の信者出入口を左右で支えている円柱のすぐ外側で柱のように上からの荷重をけなげに支えている小さな人魚がいる。拳を握り締めた両手を前に突き出し、腰で頭上からの圧力とのバランスをとっているかのようで、下半身は横座りのポーズをとり、尾は出入り口とは反対の外側に投げ出している。顔の印象は人間より猿に近いものがある。先に荷重を支えていると書いたが、見方によっては長く垂直方向に伸びた羽飾りに乗せているようにも見える。この羽飾りはフリ市サン・ペドロ教会堂の人魚の例と同じく下向きのシェブロンが連なつたデザインになっているが、このデザイン・モチーフは人魚の属性となる水に関連づけた天の恵みの雨が降り注ぐ象徴なのかも知れない。

頭飾りに乗せた人魚像でよりシンプルに表現されているのはクスコ市ピウアガの家玄関部の石彫レリーフである。^(図5)羽飾りというよりは牡丹のような大輪の花をつけた植物のようで、人魚の頭はフラワーポットという位置づけだ。上半身の表現はミニマムで腕とおぼしき要素が簡略化されたバナナのようなデザインで表現されている。この種の表現は先スペイン時代のコロンビアで制作された黄金製裝飾品によく登場するものだが、勿論直接の関係があつたかどうかはわからない。クスコ市郊外にあるキスピカンチの教会堂正面信者出入口口上部でメダ

イオンを両側から支えている人魚もユニークである。やはり頭飾りをつけているがヘアバンド状の帯に羽毛を縫いつけ、後ろにたなびかせるタイプのもので、垂直方向に立った羽飾り意匠のものとは異なる。上半身が露わになっっているが乳房の脹らみはなく男性のようだ。下半身の尾は一つで日本の鯨のようにピンと天に向かって立っている。腰の回りにはスタレ状の装飾物をつけているが、風の流れに乗って舞っているようなので、この人魚は空中を浮遊しているのだろう。

より明確に空中を飛び回る人魚のイメージはアヤクチヨ市マグダレナ教会堂の塔部を支える四本の石造角柱内側に見られる。首から下は浅い陰刻で頭部のみが立体的に表現されており、乳房は丸い円で表象されている女性タイプだ。より高い天空に居場所を決め、太陽や月、星と共存している人魚像のうち筆者が映像資料で確認できているのは今の所ポトシ市郊外のヨカリヤ教会堂のみである。左利きのポーズでチャランゴを奏で、魚の尾を持つ横座りの下半身に丸い太陽のシンボルを乗せ、頭上に八条の光りを放つ星がある。

ジスベルト論文(前掲論文)はティティカカ湖に近いテヌバ村周辺に残る人魚伝説なり人魚信仰を探る民俗史的調査の成果をまとめたものだった。この地域での民俗学的調査の蓄積はかなりあり、十九世紀以前のクロニス

タたちのまとめた文献の復刻版も少しづつではあるが出版されてきている。残念ながら筆者はジスベルトの引用している民俗学文献のほとんどに眼を通す機会が現在までなかった。ジスベルトの提唱するアンデス地域に散在するさまざまな人魚伝説の収集と比較分析、仮想する聖母マリア信仰との融合、そして図像表現での合理化のプロセスの解明などの言説は極めて刺激的である。

ラテンアメリカの(人魚学)の成果や現状は今まではほとんど知られることがなかった。つまり西欧中心に展開されてきた人魚学にとってアメリカ大陸は知識の空白領域だったのである。勿論、人魚表現を対象とした図像研究など極めてマイナーな存在だったし、そんな時代はまだ当分続くだろうとも思う。しかし将来ラテンアメリカの人魚研究が深化することによって、ヨーロッパからフリカ、それに日本や中国、インドといったアジア、それにオセアニアや太平洋諸国にも存在するであろう人魚に関する国際的、包括的な人魚学が進展する可能性も十分あるとも考えられる。筆者はまだその最後尾にやっと取りついたばかりだが、今後もラテンアメリカの人魚図像表現を基軸とした調査研究を続けたいと思っている。

(文中敬称略。)



図(4) ボマタ市サンチャゴ教会堂祭壇構壁の人魚レリーフ
十八世紀 ©C I H E



図(1) ワチャカリヤ教会堂祭壇構壁の人魚 十七世紀
©C I H E



図(2) アサンガロ教会堂身廊部壁画の人魚 十八世紀
©C I H E



図(5) クスコ市ピコアガの家玄関口標の人魚レリーフ
十九世紀初頭 ©C I H E



図(3) フリ市サン・ベドロ教会堂レタブロの人魚レリーフ
十八世紀 ©C I H E

参考文献

安部公房

『人魚伝』、「安部公房全作品」八巻、新潮社、

一九七二年

アンデルセン、ハンス・クリスチャン著、

大塚勇三編訳

『人魚姫』、福音館書店、一九九二年

青木康征他共著

『インディアスの迷宮』、勁草書房、一九九二年

荒俣宏著

『世界大博物図鑑2 「魚類」』、平凡社、一九八九年

『怪物誌』、ファンタスティック十二シリーズ、リプロ

レポート、一九九二年

Bayón, Damián, and Murillo Marx,

History of South American Colonial Art and

Architecture, Rizzoli, N. Y., 1989.

ホルヘス、ホルヘ・ルイス／マルガリータ・ゲレロ著、

柳瀬尚紀訳

『幻獣辞典』、晶文社、一九七四年

ブリックス、キャサリン著、井村君江訳

『妖精 Who's Who』、筑摩書房、一九九六年

Castedo, Leopoldo,

Reinterpretación mestiza de los símbolos cristianos,
paper presented for el Simposio sobre el arte
latinoamericano, New Orleans, 1972.

シュバリエ、ジャン／アラン・ゲールブラン共著、金光
仁三郎他訳

『世界シンボル大事典』、大修館書店、一九九六年

ダンテ、アリジエリ、寿岳文章訳

『神曲』、煉獄編、集英社、一九七五年

ドンデ・ウィック・ト著、荒俣宏監修

『人魚伝説』、創元社、一九九一年

Gasparini, Graziano,

América, Barroco y Arquitectura, Caracas,

Venezuela, 1972.

ギルマン、サンダー・L. 著、大瀧啓裕訳

『「性」の表象』、青土社、一九九七年

Gisbert, Teresa,

Quesintuu y Umantuu, las sirenas indias del lago

Titicaca, BCIHE, No. 24, 1979.

Harth-Terre, Emilio,

La sirena en la arquitectura virreinal, " El

arquitecto peruano", Lima, 1940.

畑正憲著

『人魚の国』、角川書店、一九八六年

平凡社監修

『大百科事典』、平凡社、一九八五年

ホイジンガ、ヨハン、堀越孝一訳

『中世の秋』、世界の名著五十五巻、中央公論社、

一九六七年

ホメロス著、松平千秋訳

『オデュッセイア』上下巻、岩波文庫、一九九四年

岩井俊二著

『ウォーレスの人魚』、角川書店、一九九七年

神谷敏郎著

『人魚の正体—ジュゴンの生物学』、中央公論社、「自然」、

三十五巻六号、一九八〇年

『人魚の博物誌—海獣学事始』、思索社、一九八九年

カプレル、クロード、幸田礼雅訳

『中世の妖怪、悪魔、奇跡』、新評論社、一九九七年

片岡照男著

『ジュゴン—人魚学への招待』、研成社、一九九七年

Kelmen, Pal,

Baroque and Rococo in Latin America, Dover

Publications, N.Y., 1951.

Kubler, George, and Martin Soria,

Art and Architecture in Spain and Portugal and

their American Dominions 1500-1800, Penguin

Books, England, 1959.

——, El problema de los aportes europeos no

ibericos en la arquitectura colonial latinoamericana,

BCHFE, No.9, 1968.

蔵持不二也

『異貌の中世』、弘文堂、一九八六年

曲亭(滝沢)馬琴著、白井喬二現代語訳

『南総里見八犬伝』、河出書房新社、一九七一年

ラス・カサス、バルトロメ・デ、長南実訳

『インディアス史』、大航海叢書Ⅱ期、一〇五巻、岩波

書店、一九八一年

Luks, Ilmar,

Tipología de la escultura decorativa hispánica en

la arquitectura andina del siglo XVIII, BCHFE, No.

17, Caracas, 1973

La sirena como motivo decorativo en la arqui-

ectura hispanoamericana, BCHFE, No.18, Caracas,

1974

Algunas consideraciones sobre la sirena india,

BCHFE, No.24, 1979

ツッカーナ、プロインシャス著、松田幸雄訳

『ケルト神話』、青土社、一九九一年

Marco Dorta, E. and Angulo Iniguez,

Historia del arte hispanoamericano, 3 vols.,
Barcelona, 1945-47.

マルトリュス編、豊島与志雄、渡辺一夫、佐藤正彰、阿部正孝共訳

『千一夜物語』、全十三巻、岩波書店、一九八三年

松本ちゆり著

『人魚の棲む森』、河出書房新社、一九九五年

Mercatante, Anthony S.,

Encyclopedia of World Mythology and Legend,

Facts on File, N.Y., 1988

Mesa, J. de Gisbert, T.,

Contribuciones al estudio de la arquitectura

andina, La Paz, Bolivia, 1966.

南方熊楠

『南方熊楠全集』、第六巻、平凡社、一九七三年

Moyssen, Xavier,

La catedral de Puno, AITE, No. 31, Mexico,

1962.

中原中也

『中原中也全集』、角川書店、一九七一年

野田秀樹著

『回転人魚』、新潮社、一九八五年

尾形希和子他著

『怪物：イメージの解説』、河出書房新社、一九九一年
小川未明著

『赤いろうそくと人魚』、岩崎書店、一九八九年

Palm, E. W.,

Perspectiva de una historia de la arquitectura

colonial hispanoamerica, BCHIE, No. 9, 1968.

パノフスキー、エルヴィン著、中森、内藤、清水訳

『視覚芸術の意味』、岩崎美術社、一九七一年

フランシー、コラン・ド、床鍋剛彦訳他

『地獄の辞典』、講談社、一九九〇年

Sebastian, Santiago,

El barroco iberoamericano: mensaje iconográfico,

Encuentro Ediciones, Madrid, Spain, 1990.

シェイクスピア、ウイリアム、平井正穂訳

『真夏の夜の夢』、シェイクスピア全集1、喜劇1、筑

摩書房、一九六七年

澁澤龍彦

『幻想博物誌』、角川書店、一九七八年

州之内徹著

『人魚を見た人』、新潮社、一九八五年

高橋留美子

『人魚の傷』、小学館、一九九三年

高津春繁

『ギリシャ・ローマ神話辞典』、岩波書店、一九六〇年
健部伸明と怪兵隊著

『幻想世界の住人たち』、新紀元社、一九八八年

谷崎潤一郎

『人魚の嘆き』、「人魚の嘆き・魔術師」収録、

中央公論社、一九七八年

立松和平著

『人魚の骨』、六興出版、一九九〇年

フリース、アト・ド著、山下主一郎他訳

『イメージ・シンボル事典』、大修館書店、一九八四年

ウオーカー、バーバラ著、山下主一郎他訳

『神話・伝承事典』、大修館書店、一九八八年

Wethey, Harold,

Colonial Architecture and Sculpture in Peru,

Cambridge, Mass., 1949.

山田忠雄主幹

『新明解国語辞典』、三省堂、一九九五年

山崎洋子著

『長崎・人魚伝説』、集英社、一九九二年

『人魚を食べた女』、神奈川新聞、一九九七年一〇月二十

六日より連載中。

柳宗玄・中森義宗編

『キリスト教美術図典』、吉川弘文館、一九九〇年

イエイツ、W・B・編井村君江編訳

『ケルト妖精物語』、筑摩書房、一九八六年

備考：

BCHIE: Boletín del Centro de Investigaciones

Historicas y Estéticas

AHE: Anales del Instituto de Investigaciones

Estéticas